

のり越えよう

葛 井 義 顕

奨励者紹介〔ふじい・よしあき〕

日本キリスト教団土師教会牧師

あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

(コリントの信徒への手紙一 10章13節)

堺市中区にあります日本キリスト教団土師教会の牧師をしている葛井義顕と申します。本日は同志社大学のチャペル・アワーでお話しさせていただく機会が与えられ、非常に嬉しく思っております。私は同志社大学出身ではありませんが、同志社大学に非常に親しみを感じています。父はこの同志社大学で、博士課程後期を修了しています。また父母はこの同志社大学で結婚式を挙げたと聞いております。また、私が幼い時から今まで、多くの同志社出身の牧師先生たちに大変お世話になりました。私自身は、少しへそ曲がりな性格で、牧師になると決めた時、父と比較されるのが嫌で、同志社大学を避けて、関西学院大学に入学しました。しかし、私にとっては親しみのあるこの大学のチャペル・アワーにお招きいただき、非常に嬉しく思っております。本日は、コリントの信徒への手紙一10章13節から、「のり越えよう」というテーマで語りたいと思います。

試練は越えることができるのか。苦しく、悲しい日々は消え去るのだろうか。私たちは大きな試練や長く続く悲しみの日々の中で、こんなことを何度も何度も考えます。そして、その苦しみが大きく、長く続けば続くほど、そこから脱出できない惨めな自分たちの姿を思い描きます。「これも運命だから仕方ない。運命の力の前には小さな人間の力などひとたまりもない」。諦めとも、嘆きともつかない言葉を、私たちは吐いてしまいます。私たちの人生の中には、こんな辛く、苦しい日々は何度もあったと思います。また、今後も、何度も訪れてくることでしょう。

しかし皆さん、考えていただきたいのです。あの黒雲のような悲しい日々が何年も何年も続き、闇に閉ざされたままで、光が全く差し込まなかったでしょうか。そんなことはなかったはずで、いかに苦しみが続くとも、その中には喜びや平安があったはずで、生きる勇気や友たちの励ましがあったはずで、

エフェソの信徒への手紙6章20節で、パウロはエフェソの人々に祈って欲しいと申し出ます。彼はキリストの弟子として、主イエスの福音をギリシャ、ローマまで伝えた人物です。そして、キリスト教を迫害するローマ帝国に捕えられた人物です。彼は今、ローマの牢獄につながれ、ローマの官憲の監視の下におかれています。それは身体の不自由と死の不安を味わうものです。信仰の友たちと別れて、淋しく、苦しい日々です。しかし、パウロはこの不自由な牢獄生活の中で、神が日々共にいてくださることを知っています。また、同じ信仰の友の祈りの輪に入れられる中で、死の不安を越えて、力が体中に湧き上がってくることも

知っていました。

これは素晴らしい信仰者パウロだから、こんな境地を獲得することができたのだ、と思われるかもしれませんが。しかし、神様の眼から見れば、パウロも私たちも同様にかわいい神の子どもなのです。パウロがもちえた信仰を私たちがもつことができない、などと言うことはできません。

パウロはコリントの信徒への手紙一10章13節でこんなことを言っています。

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」。

真実の神様は、私たち以上に私たちのことをよく知っておられます。神様が私たちに試練を与えられても、それが私たちに無駄になるように与えておられません。私たちを絶滅させようとして与えてはられません。それよりも、この試練をとおして、私たちが一回りも二回りも、人間的に、信仰的に、大きくなるように、与えておられるのです。

そして、その辛い試練は私たちが担うことのできないものではありません。神様は私たちが担えるから、担える試練を与えられるのです。また、その試練を背負って、越えていくことのできる救いの道を用意してくださっています。

私の友人の子どもに「開(かい)」という名前の子がいます。友はこの「開」という名前を、マルコによる福音書7章31—35節から取りました。このマルコによる福音書7章31—35節で、主イエスは耳が聞こえず、口もきけない人とガリラヤの海辺で出会いました。この人の家族や友人は、この人がなんとか耳が聞こえ、喋ることができるようになることを祈っていたのです。

そこへ病人を癒されるという評判の主イエスが来られました。家族や友人は藁をも掴む思いで、この人を主イエスの所に連れて行きました。そこで、主イエスはこの人の両耳に指を入れ、この人の舌を主イエスの唾でぬらして、祈られました。そして突然、「エツファタ」「開け」と叫ばれたのです。すると、この人の耳は聞こえ、喋ることができるようになりました。この人の耳に、人々の優しい言葉が聞こえてきます。人々に感謝したいこの人の思いがこの人の口から出ます。「開け」たのです。人々と心を開いて交わることができるようになったのです。

私の友人は二人目の男の子に、この箇所から取って、「開」と名付けました。初めの子は「鍊」と言います。この鍊君は、ローマの信徒への手紙5章3—5節の「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません」、この言葉から取りました。鍊君のことは、私の心にふと、時折浮かびます。

この鍊君は脳骨症という病気で、手足も言葉も脳も発達がままならないのです。待ちに待った最初の子が障がいをもって生まれてきた。友人夫婦は、初めは驚き、悲しんだことでしょう。聖書を何度も何度も読み、祈りを何度も何度も繰り返したことでしょう。

そんなある日、彼らはエドナ・マシミラの「天国の特別な子ども」という作品に出会いました。その詩の最後に、こんな言葉があります。

「天から授けられたこの子によって、ますます強い信仰と豊かな愛を頂くようになるでしょう。やがて、二人は自分たちに与えられた特別の神のおぼし召しを悟るようになるでしょう。神から贈られたこの子を育

てることによって、柔和で穏やかなこの尊い授かりものこそ、天から授かった特別な子どもなのです」。

このマシミラの詩に、彼ら二人は自分を重ねつつ、希望をもって、力強く、信仰豊かに生きようとするのです。そして、二人目の子に「開」と名付け、お兄ちゃんの鍊君と、また両親と、あるいは今後できる友だちと、「心を開いて交わり」豊かな仲間作りのできる子に育って欲しいと祈るのです。

困難な試練はその人たちを打ちのめし、そこに苦しみ伏したままで終わることはありません。その試練の下から、天を仰ぎ、祈り、希望をもって生きるように、神様はして下さいます。

この友たちの信仰に私は多くのことを学ばされ、教えられます。試練や苦難は、試練や苦難のままではありません。そこを越え出る道は確かに用意されています。そこを越えて、新しく生まれることのできる力を備えられています。神様は私たちがいかなる状況にあろうとも、そこにいて下さいます。私たちに励ましと愛の言葉をもって臨んで下さいます。私たちに力を与えて下さいます。

どうぞ神様に祈ってください。どうぞ神様に語り続けてください。どうぞ神様に平安を求めてください。皆さんの必死な祈りは確かに聞かれます。

2017年7月19日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録